

# 語用論的意味の持つ多様な分かり易さ

高山 林太郎

キーワード: 丁寧体 役割語 分かり易さ 記号論 幼児語 オノマトペ  
ふるえ音 吸着音 間投音 主題 日本語諸方言 朝鮮語 中国語

## 要旨

本稿は「分かり易さ」に関して、恣意的な言語（より分かりにくい、とりたて詞など）から、丁寧体や役割語（少し分かり易い）を経て、間投音やオノマトペ（より分かり易い、例えば言語を分かりもしない幼児や動物に対しても）に至る、意味の連続体が存在する事を指摘する。

### 1. はじめに

本稿は高山（2013c）の改訂版であり、文法理論的な側面だけをまとめ、本稿の為に新たに加筆したものである（間投音等に関する詳細な調査資料とその考察については別稿に譲る）。

2 節では知的意味（＝命題的意味）と情的意味（＝語用論的意味）とを区別する妥当な方法について先行研究を引きながら論ずる。

3 節では丁寧体、役割語、間投音の意味の分析を通して、恣意的な言語の一部であるはずの丁寧体がジェスチャー性を免れ得ないこと、社会言語学の概念である「分かり易さ」が語用論的意味の重要な構成要素であり、オノマトペの特殊性の源泉でもあることなどを論ずる。

4 節ではまとめを述べ、補完として主題を表すとりたて詞「は」について論ずる。

### 2. 「パラ言語的意味を基準とした音韻論」（前川 2002）から出発して

高山（2013a, 2013b）は語用論的意味の内部を分類する日本語文法の立場に基づき、イントネーションを分類し、所謂「強調形」のアクセントの存在を指摘して、それらの意味を分析している（ここまでの発表内容を纏めた文章を高山（2013d: 11-16）に記載した）。本稿はセグメントの特殊なものの一部について、意味を分析し、資料とその考察を示す。

仁田（2004: 11-14）「文法とは何か」(①, ③～⑤)、西山（2004: 3-17）「語用論の基礎概念」(①～③)、前川（2004: 3-4）「音声学」（藤崎（1994）の分類；⑥～⑧）より本稿の議論を進める上で前提となる重要な概念・用語を箇条書で 8 点、以下に要約・補足・再構成する。

①命題… 話し手が外界や内面世界との関係において描き取ったひとまとまりの事態、文の意味内容のうち客体化・対象化された出来事や事柄を表した部分。文節で構成される。個々の文節には、世界の一断片を写し取ったところの語彙的意味を表わす側面と、他の単語に対する関係づけ等の文法的な意味や機能を担う側面がある。

②語用論… 一般には形式を持つ命題を扱う「意味論」に対して、形式のない推論的な意味・機

能を扱うものを「語用論」と呼ぶ。ここから、本稿では文法で扱う意味のうち命題の意味「以外」のものを語用論の意味と呼ぶが、文法で扱う以上、何らかの形式によって表わされることが前提であり、本稿で言う「語用論」は語用論の本義（＝形式を持たないこと）からは外れている。

- ③文法… 明確に規定できる形式を持つ、文の命題の意味（語彙の意味、文法の意味）、語用論の意味（文のモダリティの意味、連文的・文脈の意味など）を扱う。
- ④命題めあてのモダリティ… 発話時における話し手の命題に対する認識的な捉え方・把握の仕方を表したもの。断定・推量（に違いない、はずの、だろう、…）など。
- ⑤発話・伝達のモダリティ… 文を巡っての発話時における話し手の発話・伝達の態度のあり方、その文の発話・伝達の役割・機能を表したもの。終助詞「か、よ、ね」など。
- ⑥言語的情報（linguistic information；命題の意味＝知的意味相当）… 主知的な意味の対立に関係する情報。話者による意識的な制御をうけ、離散的な表現が可能である。
- ⑦パラ言語的情報（paralinguistic information；語用論の意味、情的意味相当）… 対話の制御にかかわる情報のほか、発話の意図や話者の心的態度に関する情報が含まれる。話者によって意図的に制御されるが、単一の意味カテゴリーの内部で、量的かつ連続的な変化（例えば「疑い」の強弱）が生じうる点で、離散的な言語的情報と異なる。※形式の非離散性が特徴となるが、その「パラ言語的意味」は語用論の意味の一部と考えられる。
- ⑧非言語的情報（nonlinguistic information；情的意味相当）… 話者が意識的に制御することのできない情報であり、主として話者の身体性に関する情報である。話者の性別や個人的特徴のほか、体調の良否や、生理的反応としての感情（恐怖、驚きなど）も含む。

知的意味（＝命題の意味）の弁別に基づく音韻は、語用論の意味（＝情的意味）を区別していてもよいが、語用論の意味の区別を以って命題の意味の弁別に基づく音韻が議論されることは無い。しかしここで語用論の意味を単純に排除するのではなく、語用論の意味だけを表わす特殊な音声まで含めた総合的な音韻論を構築し（前川 2002）、従来の命題の意味の弁別に基づく音韻（「（通常）の音韻」と、それ以外の語用論の意味の区別のみに基づく音韻（「語用論的音韻」とを本稿では区別する。

他方で従来の命題の意味の弁別に基づく音韻を「命題的音韻」という言い方で呼ばない理由は、「通常音韻」が時に語用論の意味を表す場合を排除しないからである。もし排除するならば、例えば発話・伝達のモダリティを表わす終助詞「ね」の分節音 [ne] は音韻 /ne/ ではないことになる。

### 3. 特殊なセグメントに関わる語用論の意味の構造——信頼性、類似性、有縁性——

#### 3.1. 信頼性

敬語の中でも、尊敬語・謙譲語は原則、上下関係を事態＝命題の意味として表わすもので、デス・マスのような上下関係を表さない丁寧体とは別物である。またもし丁寧体が聞き手と話し手の間の上下関係の表現なら、互いに丁寧体で喋ることは矛盾をきたす。その丁寧体に

ついて仁田 (1991: 193) は次のように述べている (引用文中の【 】や下線は引用者による。)

「〈丁寧さ〉とは、基本的に、聞き手の存在する発話【略】にのみ分化・存在し、話し手の聞き手に対する述べ方の丁寧度に関わる態度【＝語用論的意味】を表すものである。〈丁寧さ〉は、文のある部分に局在するといったものではなく、言表事態【＝命題的意味】全体に対して、それに、ある丁寧度の述べ方の色合いを塗り付けるといったものである。局在するのではなく【略】全体に対して【略】付与するといったことが、〈丁寧さ〉といったカテゴリをして、文的度合いの様々な節での出現を可能にし、固有の作用域を主張せず同一の節に複数回現れることを可能にしている基因である。」

作用域が局在しないため、発話・伝達のモダリティの中では特異なものとなっている。というのも、「述べ立ての文が連文の中で使われる時、その発話・伝達のモダリティの発現が抑圧・希薄化されるといった現象」(仁田 1989: 54) などから知られるように、発話・伝達のモダリティは原則、文末に局在し、文中に現れにくいので、丁寧体は例外的存在となる。

さて、滝浦 (2007) は丁寧体について「それ自体が対人的な距離の大きさを表示する」としている。そもそも滝浦 (2007) の主題は終助詞で、終助詞「か／よ／ね」に、順に、「か」:[-話し手](話し手の判断保留・判断放棄)、「よ」:[+話し手](話し手の一方的言明)、「ね」:[+聞き手](聞き手への共有の確認・促し)(但し、「+／-」は当該の情報が話し手なり聞き手なりの管理下に“ある／ない”ものとして伝達されるということ)という「弁別素性」を立てて中核的な「意味機能」とし、環境・文脈に応じて派生するその他の意味を語用論的な「コミュニケーション機能」とするものである。滝浦 (2007) は諸説を批判するに当たって「話し手と聞き手の間の認識のギャップ」(大曾 1986・陳 1987) やそれによく似た用語を取り上げ、最終的に上記の結論に達し、言わば「話し手と聞き手の間の情報の管理」という形になっている。もし丁寧体の意味を、「丁寧さ」であるとか、「それ自体が対人的な距離の大きさを表示する」というような漠然とした規定でなく、「話し手と聞き手の間の情報(の差)」という観点に即した形で再規定できるなら、その方が滝浦 (2007) の主旨にも合致するように思う。そこで以下の議論では、滝浦 (2007) の主旨に合致するような形に丁寧体の意味を読み替える。

丁寧体が使われる局面は、身内(迷惑を掛け合ってもよく、ぞんざいな扱い)に対するよそ様(迷惑を掛けてはならず、丁寧な扱い)でありかつ、敵(排除するもの)に対する味方(大事にするもの)、即ち、「よそ様を味方にしたい」場合である。なお対人的に距離が大きい「敵」(排除対象)にも、最早「気遣い」無用の段階なら丁寧体は用いないため、「それ自体が対人的な距離の大きさを表示する」という規定には瑕疵があることが分かる。さて「よそ様を味方にしたい」場合、つまりこれから一定の社会的な信頼関係を結びたいという時に、つまり話し手の信頼性が聞き手にとって不確かな場合に、話し手に「信頼性あり」をマークするのが丁寧体の語用論的意味と考える。家族的・友人的な信頼関係の中で慣れ親しんだ身内・仲間であれば

言動の信頼性は分かり易いが、他人同士には容易には分からない。だからこそ、自らが信頼に足る人物であることを言葉で聞き手にアピールする必要があるのである。

丁寧体はネクタイのようなものであると考えれば話が理解し易い。自身が社会人であることをアピールするためにネクタイを付ける。小さな子供がネクタイを着けるとおかしい。家で家族に対してネクタイを締めて対話をするのは余り日常的な場面とは言えない。

### 3.2. 類似性

信頼性(≒説得力)は発言者の社会的地位等によって変わるので、「信頼性ありなし」には「話し手属性」を指定する含み(スロット)があると考えられる。そこをより具体的に指定する、即ち「類似性」を付加するものとして以下の4種が挙げられる。なお逆に言えば、「類似性」には常に「信頼性ありなし」が付随するということになる。

丁寧体の類例として、「発話全体に塗り付ける形式」の例を見る。仁田(1991:201-202)にある接続詞「だから/ですから」のような交替を「テスト」として用いる。仁田(1991)補注4に「さほど多くないと思われるものの、女性語では、聞き手の想定が明確でない場合であっても、「私って、何ておっちょこちよいなんでしょう。」のように、丁寧体の現れることがある」とある。これは所謂「役割語」(金水2003)で、(田舎で方言を用いていると見なされる)老人を擬する為に助動詞「だ」を「じゃ」に換える(従って接続詞「だから」も「じゃから」に換える)形式と同様に、(社会的に丁寧さを要求されるジェンダーとしての)女性を擬するものであると考える。これらは話し手が擬する対象を、その対象がよく用いる助動詞で換喩するもので、老人・女性らしさという「類似性」を付加している。社会言語学では古くから、男性より女性の方が、方言より標準語を用いる場合の多いことが知られる(トラッドギル1975)。また世間の通念として標準語の方が丁寧であるとされる。残念ながら差別的な観点からは、老人・女性・田舎者は何らかの形で能力が低く、信用できない(「信頼性なし」という理屈になり、定年退職制度、出産退職、方言札(標準語教育)など、近現代にもその社会構造が見られる。

更に、音節「ナ」を「ニャ」に換えて(従って接続詞「なので」も「ニャので」に換えて)猫を擬する形式<sup>1</sup>、サ・ザ行をチャ(～シャ)・ジャ行に換えて(従って接続詞「ですから」も「でちゅから」に換えて)幼児を擬する形式が存在する。猫は鳴き声の擬音が「ニャー」であり、幼児は舌足らずからサ・ザ行をチャ(～シャ)・ジャ行にしがちであって、これらは話し手が擬する対象を、その対象の発音上の特徴で換喩するものであり、猫・幼児らしさという「類似性」を付加している。猫は動物であるため「信頼性なし」に当たると考えられる。幼児も「僕ちゃんよく分かりまっせん」、「ちよんなの分かってまっちゅ」のように、或る種の「信頼性なし」を表現することができる。ちなみに、幼児に話し掛ける際にも同様の形式を用いるが(「僕ちゃんいい子でちゅねー」と褒める場合等)、幼児を相手にする者は一時的に、幼児が理解できる範囲の単純な内容に限定して伝達するようになる。数学者が一般人に数学の話(あまり)しな

<sup>1</sup> 犬猫等を擬する「だワン、だニャン、…」のような形式は接続詞までは塗り替えられないので別物である。

いと同じで、善意でも悪意でも相手のレベルに合わせている。この「合わせる」というのは「擬する」ことの一つの派生された機能で、基本は「擬する」点にあると考える。

以上の4種は大人の間人としての「信頼性」という観点から「信頼性なし」の例として分析したが、庇護される存在としての「可愛さ」という観点から見た場合、「可愛さあり」の例としても分析できる。「類似性」は多角的に評価されうるものと考えられる。

### 3.3. 有縁性

さて、「恣意的」な言葉の命題的意味とモダリティの意味が分かった上で、更に「類似性、近接性」、両者を総称して「有縁性」（「分かり易さ」の一種）を付加すれば、情報がより分かり易くなる。これらは情報の伝達における「意図的な分かり易さ」であり<sup>2</sup>、また通常は、付加的な形（＝分かり易くする形）でしか用いられない。手話では手指の動作をより恣意的に用いるが、口頭の言語では「類似性、近接性」を付加する（＝事態の内容や感情・意図を分かり易くする）為にジェスチャーを共起させる。また、口頭の言語ではイントネーションに、手話では表情に、「近接性」を付加する（＝感情・意図を分かり易くする）為の要素が、殆ど常に含まれていると見る（具体的な分析は著者多数（2013）の「フィラー、感動詞・応答詞、あいづち、間・沈黙、バラ言語、りきみ、視線、表情、ジェスチャー」特集を参照されたい）。分かり易くするというのは、あくまでも意図的であって、自然と分かることとは区別される。

すると丁寧体は「類似性」が希薄で「信頼性あり」が濃厚なもので、老人・女性・猫・幼児に擬する形式は「信頼性なし」が希薄で「類似性」が濃厚なものと分析される。丁寧体が「発話全体に塗り付ける形式」であるのは、そもそもジェスチャーが口頭の言語に対して並行的・非線条的だからで、語用論的意味の上部層にはジェスチャーに通じる層があると考えられる。なお「類似性」としての丁寧体は、「大人、社会人、信頼される人」を擬するもので、話し手が何らかの形で信頼に値しなくても、信用されたければ、背伸びして使い、話し手が身体・社会行動として、改まった態度で（畏まった態度でなく）聞き手を丁寧<sup>2</sup>に待遇することを目指していること（＝信頼性）を、聞き手に知らせる為のものであると考えられる。

最後に、「近接性」を付加する例として、感情や意図の存在を分かり易くするセグメントの例を見る。言葉の通じない、2、3歳までの幼児や動物に対して、単純な感情や意図を伝達するなら、明瞭で有標な音声<sup>3</sup>を添えるのが効果的である（拍手やハンドベルでもいいが、両手は塞がり易い）。日本には、有声両唇ふるえ音を長く発して「(2、3歳までの幼児を)可愛がる・あやす・注意を引く」間投音（所謂「唇ブルブル」）や、前寄りの吸着音を連発して「(餌をやる際など、鳥獣を)呼ぶ・注意を引く」間投音（所謂「ねず鳴き」；「雀の子のねずなき

<sup>2</sup> 「分かり易さ」は本来社会言語学概念で、日本語学習者などに対する日本語の分かり易さなどを意図した用語であり、「有縁性」の範囲に留まらない概念だが、本稿は幼児や動物に対する分かり易さを中心に（あるいは原点に）据えている。ところで、オノマトペには「類似性」（意味と形式の類似性）があるとされる。また「ピカピカに」を「ピッカピカに」とすれば、更に「近接性」（意味の強めによる形式の強め）が加わるだろう。併せて「有縁性」（分かり易さの一種）がある。オノマトペが子供っぽいとされ、幼児や児童に対してよく用いられるのは、オノマトペが「分かり易い」からであろう。このように「分かり易さ」は社会言語学や日本語教育に留まらず、オノマトペやその周辺に関わる文法にも取り入れることができると考える。

するにをどり来る」『枕草子』より。現代でも古語として言及される)が存在する。通常の音韻セットに無いこれらの音声も、それ自体では感情の正負が指定されておらず、社会的な慣習として決まっっていて、例えば1回だけ前寄りの吸着音を発して「怒り・苛立ち・不平」を表わす間投音(所謂「舌打ち」<sup>3</sup>)もある。「唇ブルブル、ねず鳴き、舌打ち」の3つの間投音は、日本列島(青森市、盛岡市、東京、東村山市、岡山県、尾道市、高知県、甕島、沖永良部島で複数人数調査)とその周辺地域(中国朝鮮族、中国漢民族で類似したものを確認)に広く分布している(高山2013c)。間投音や間投詞というのは、音声連続としては勿論発話内で線条的に発せられるが、文法構造に縛られず比較的自由的な位置に出現することから「間投」と名付けられたもので、出現位置が文中の特定の位置である必然性は無く、「それにしてもエエ、ほんとにエエ、いつもいつもエエ、お世話になってエエ」のように複数回の出現も可能なことから、これもやはり口頭の言語に対して或る程度並行的であると言える。

#### 4. まとめ

以上より、語用論的意味の上部層(側部層)には「有縁性」など「分かり易さ」の層があると考え。命題的意味を平面上で包むモダリティ的意味の更に外側ではなく、それぞれの上側(側面)をそれら(=「類似性」,「近接性」,その他の「分かり易さ」)が覆うと考える。人間は母国語を分からない外国人や、未発達の幼児や、低知能の動物ともコミュニケーションするので、この層の存在自体は自明だが、位置として、語用論的意味の上部層(側部層)にあるという点は、丁寧体・役割語との連続性から推測されることであり、この層にもセグメントは用いられている(手指や音調ばかりでなく)。恣意的な言語との連続性を様々な角度から検証して、位置付けを検討する必要がある。

最後に補完すると、「その他の「分かり易さ」というのは、例えば情報構造上の旧情報または主題をマークするとりたて詞「は」である。「江戸の浅草で生れた」→「江戸は浅草で生れた」、「象の鼻が長い」→「象は鼻が長い」、「僕が田中だ」→「僕は田中だ」、「九九を知っている」→「九九は知っている」、「僕に鰻を頂戴」→「僕は鰻を頂戴、僕には鰻を頂戴」、「学校で習わない」→「学校では習わない」、「学校へ行かない」→「学校へは行かない」、「君と遊ばない」→「君とは遊ばない」、「今日やる」→「今日はやる」等々あり、格助詞を塗り替えるケースと、格助詞や副詞に後続するケースがあるが、前者は「発話全体に塗り付ける形式」と作用の仕方が似ている。また、次の主題が現れるまでは一つの文を超えて(時には延々と)主題が継続するといった特徴があり、この点も「発話全体に塗り付ける形式」と作用の範囲が似ている。主題は情報を理解する上での基礎にして出発点であり、主題が分からなければ情報を理解することは難しい。主題が何であることを示すということは情報を「分かり易く」するということにほかならない。しかしながら形態素「は/wa/[wa]」が主題を表すということは言語の恣意性に属する事象であり、この「分かり易さ」は「有縁性」とは分析できない。

<sup>3</sup> 舌打ちは「聞き手は必須でない」という点で唇ブルブル、ねず鳴きとは異なっている。

参考文献

- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』——『はい、そうです。』」『日本語学』5(9): 91-94. 東京: 明治書院.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京: 岩波書店.
- 高山林太郎 (2013a) 「音調が文法的・語用論的意味を表わす場合の音韻解釈—日本語諸方言を例に」第 8 回音韻論フェスタ口頭発表. 湯の宿木もれび (滋賀県), 2013 年 2 月 18 日.
- 高山林太郎 (2013b) 「句頭の上昇の語用論的な意味と機能」第 126 回関東日本語談話会口頭発表. 学習院大学, 2013 年 3 月 9 日.
- 高山林太郎 (2013c) 「情的意味を表わすふるえ音・吸着音の日本列島周辺における分布」『第 27 回日本音声学全国大会予稿集』23-28, 口頭発表. 金沢大学, 2013 年 9 月 28 日.
- 高山林太郎 (2013d) 「日本語諸方言の四モーラ畳語を比較する試み」『eTULIP』34: 11-16. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 滝浦真人 (2007) 「終助詞「かよ/ね」の意味機能とコミュニケーション機能——モダリティーとポライトネスの観点から」麗澤大学言語研究センター第 31 回研究セミナー口頭発表. 麗澤大学, 2007 年 2 月 28 日.
- 著者多数 (2013) 「話しことば」『日本語学』32(5): 9-129. 東京: 明治書院.
- 陳常好 (1987) 「終助詞——話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』6(10): 93-109. 東京: 明治書院.
- トラッドギル, Peter (1975) 『言語と社会』東京: 岩波書店.
- 西山佑司 (2004) 「語用論の基礎概念」田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (著) 『言語の科学 7 談話と文脈』1-54. 東京: 岩波書店.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティーの体系と構造」『日本語のモダリティー』(5 刷) 1-56. 東京: 岩波書店.
- 仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての丁寧さ」『日本語のモダリティーと人称』(2 版 2 刷) 185-202. 東京: ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2004) 「文法とは何か」益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏 (著) 『言語の科学 5 文法』1-40. 東京: 岩波書店.
- 藤崎博也 (1994) 「韻律研究の諸側面とその課題」『日本音響学会平成 6 年度秋季研究発表会講演論文集 1』287-290. 熊本大学, 1994 年 10 月 31 日~11 月 2 日.
- 前川喜久雄 (2002) 「研究室から: 失われた意味を求めて」『国語研の窓』10.
- 前川喜久雄 (2004) 「音声学」田窪行則・前川喜久雄・窪菌晴夫・本多清志・白井克彦・中川聖一 (著) 『言語の科学 2 音声』1-52. 東京: 岩波書店.

# Pragmatic Meanings Have Varied Intelligibilities

TAKAYAMA Rintaro

takayama\_rintaro@nifty.com

**Keywords:** Simply Polite Language, Role Language, Intelligibility, Symbology, Baby Talk, Ideophone, Trill, Click, Interjection Phone, Topic, Japanese Dialects, Korean, Chinese.

## Abstract

This paper shows that there exists a semantic continuum of “intelligibility” from arbitrary language (less intelligible, such as focus markers), via simply polite language and role language (a little intelligible), to interjection phones and ideophones (more intelligible, even to prelinguistic infants and animals).

(たかやま・りんたろう 東京大学大学院博士後期課程)